

國學院大學 研究開発推進機構 機構ニュース

Vol.20 No.1
 発行人 笹生 衛
 編集人 渡邊 卓
 〒150-8440 東京都渋谷区東
 4丁目10番28号
 電話 (03) 5466-0104
 FAX (03) 5466-9237

令和8～12年度日本学術振興会科学研究費補助金「特別推進研究」

「鷹島海底遺跡における「産官学民」協働による 水中文化遺産保護活用システムの構築」の採択

池田 榮 史

平成18年1月1日、長崎県北部に位置する旧松浦市と福島町、鷹島町が合併し、新たな松浦市が誕生した。新、松浦市は伊万里湾を取り囲むように広がる。

鎌倉時代の1281年に起きた二度目のモンゴル襲来(弘安の役)の際、この伊万里湾に避難した元軍船団は暴風雨に見舞われ、壊滅したとされてきた。これを物語るように、伊万里湾の北側を塞ぐように横たわる鷹島の南海岸には中国陶磁器の破片が多く打ち寄せられ、また湾内で操業する底曳網の中からは「元寇壺」と呼ばれる中国陶器がたびたび引き揚げられてきた。

昭和55年、このことに着目した東海大学海洋学部茂在寅雄教授(当時)は「文部省科学研究費補助金特定研究」を受けて、「モンゴル襲来の解明」を目指した音波探査装置と水中考古学手法の融合による実験的調査を実施した。これを嚆矢として、伊万里湾に残されたモンゴル襲

来の解明を目指した「鷹島海底遺跡」の調査が継続的に行われることとなった。

筆者は平成4年に旧鷹島町教育委員会が実施した鷹島床浪港改修工事に先立つ発掘調査以来、鷹島南海岸で実施される水中調査には折々に参加してきた。その上で、平成18年度からは自ら二度にわたる科学研究費補助金基盤研究(S)の採択を受けた調査研究に取り組み、平成23年に鷹島1号沈没船、平成25年に鷹島2号沈没船を発見する成果を挙げた。なお、文化庁では鷹島1号沈没船の発見を受け、平成24年に「鷹島神崎遺跡」を水中遺跡としては日本で初めての国史跡に指定している。

その後、「鷹島神崎遺跡」を管轄する松浦市教育委員会では、筆者による科学研究費補助金を受けた調査研究で確立した元軍船および関連遺物の調査手法を継承した調査を令和5年度から実施し、鷹島3号沈没船を検出するに至っている。

目次

令和8～12年度日本学術振興会科学研究費補助金「特別推進研究」

「鷹島海底遺跡における「産官学民」協働による水中文化遺産保護活用システムの構築」の採択

池田榮史…1

令和7年度研究事業成果報告 日本文化研究所

星野靖二…2

令和7年度研究事業成果報告 学術資料センター(考古学資料館部門)

深澤太郎…3

令和7年度研究事業成果報告 学術資料センター(神道資料館部門)

大東敬明・木村大樹…4

令和7年度研究事業成果報告 校史・学術資産研究センター

渡邊 卓…5

令和7年度研究事業成果報告 研究開発推進センター

武田幸也・半田竜介…6

令和7年度研究事業成果報告 研究開発推進センター

宮本誉士…7

令和7年度研究事業成果報告 研究開発推進センター

渡邊 卓…8

令和7年度研究事業成果報告 國學院大學博物館

高橋あかね…9

人事一覽

深澤太郎…12

往還

深澤太郎…12

なお、筆者は自らの調査後、保存処理や展示施設の問題から直ぐに引き揚げる事ができず、現地保存を図った鷹島1・2号船の保存手法の妥当性を検証し、将来の引き揚げに備えた新たな保存処理手法の開発検討を目指した科学研究費補助金基盤研究(S)を申請し、平成30年から3年間の採択を受けた研究に取り組んできた。

今回、令和8～12年度の5年間の計画で採択を受けた科学研究費補助金特別推

進研究の課題「鷹島海底遺跡における「産官学民」協働による水中文化遺産保護活用システムの構築」はこのような筆者による科学研究費を受けた調査研究実践と、松浦市教育委員会による鷹島海底遺跡保存活用の取り組みをさらに推進し、これを契機として日本における水中文化遺産行政の充実を図るとともに、これまでに培った調査研究および保存活用手法を日本だけでなく、広く世界へと展開する試みである。

令和7年度研究事業成果報告 日本文化研究所

宗教文化研究と学術情報発信の推進

星野靖 二

一、研究事業の概要

本事業は、本学のこれまでの研究蓄積を發展的に継承する形で、日本の宗教文化に関する研究を更に展開させていく。また、その成果である学術情報を、英語・多言語化に可能な限り対応させながら、国内外に発信していく。具体的には以下のような事業を行う。

（1）宗教文化研究の推進

宗教文化に関する研究について、その現在の状況を調査しながら、研究を行う。広く神道・日本宗教について取り扱うのに加えて、宗教研究と認知科学との関係にも目を向け、これをカミ学との関連のうちに検討する。適宜研究会を開催する。

（2）旧日本文化研究所における研究成果の再検討

令和7年度は旧日本文化研究所設立70周年であり、旧日本文化研究所以来蓄積されてきた学術情報を整理しながら、70年の歩みについてまとめ直す。特に、旧日本文化研究所の設立後に営まれていた神道研究と、その国際発信の営みについて再検討する。「盲点の会」や「現代神道研究会」の活動、また神道国際会議等について調査・研究し、音声テープや動画等、他の所管資料の内容についても検討していく。

（3）神道・日本宗教に関する学術情報 の国際発信

Encyclopedia of Shinto 等各種データ

ベースを拡充しながら、特に英語での神道・日本宗教に関する学術情報の発信を行う。カミ学に関連する学術情報の発信を念頭に置いて、英語コンテンツの作成・発信を、運用中の Shinto Portal の拡充とともに推進する。英語圏での神道・日本宗教の研究状況を調査し、日本国外の神道・日本宗教研究者との交流を推進する。公開の研究会を開催し、学術情報を広く社会に発信しながら、国内外の研究者との交流を深める。国際研究フォーラム等を主催して国内外研究者を招聘し、また国際学会への参加・発表等を通して、国際的な研究交流を行う。

二、令和7年度の研究事業成果

（1）宗教文化研究の推進

藤井修平が国立歴史民俗博物館と研究開発推進センターとの合同研究会において発表を行った（藤井修平「神・靈魂をいかに考えるか―宗教認知科学と考古学の連携可能性―」合同研究会「宗教認知科学からみる考古学―顔身体象徴を中心に―」、7月26日、ハイブリッド開催）。

（2）旧日本文化研究所における研究

成果の再検討

星野靖二が旧日本文化研究所設立以来の歩みについて「日本文化を知る講座」で講演した（星野靖二「沿革と概観」第50回日本文化を知る講座「國學院大學の

日本文化研究の歩み」、7月12日、常磐松ホール）。

21世紀COEプログラムと旧日本文化研究所の成果を中心にデジタル化、整理を進めた。研究開発推進機構全体の事業として、未電子化のマイクロフィルムの電子化を行った。柳田國男講義テープのうち、約四十本の翻刻を完了し、校正を行っている。

旧日本文化研究所草創期に開催されていた研究会について調査を進め、解説を作成した。旧日本文化研究所の事業について調査し、情報を整理した。

本学図書館収蔵近代宗教雑誌の調査・目次作成を進め、数誌の解題を作成した。

（3）神道・日本宗教に関する学術情報 の国際発信

Encyclopedia of Shinto や Basic Terms of Shinto などのデータベース、またポータルサイトである Shinto Portal について、運用・改善した。研究所のウェブサイト、各種SNSを通じて情報発信を行った。Kokugakuin Japan Studies 第7号において、本学教員の研究論文を三本英訳し、刊行した。

研究会などの催事を4回主催し、2回共催して、国内外の研究者との交流を深めた。昨年度開催した国際研究フォーラム「つむがれる宗教文化―生み出されるカタリとカタチ」の報告書を刊行した。

令和7（2025）年度の国際研究フォーラムとして、12月13日に「日本／宗教をとらえなおす…ウチとソトを越えて」を開催した（報告者・題目・ケイト・ナカイ（上智大学名誉教授、日本文化研究所客員教授）「海外」と「国内」…日本宗

教研究の交差とずれ」、ジョリオーン・トーマス（ペンシルベニア大学准教授）「文化」とは何か？戦後宗教学における「日本」概念を再考する」、ヤニス・ガイタニデイス（千葉大学准教授、日本文化研究所共同研究員）「日本宗教、日本の宗教、日本と宗教…「日本」と「宗教」をめぐる多様な本質主義をどう乗り越えるか」。コメント…林淳（東洋大学客員研究員、日本文化研究所客員教授、問芝志保（東北大学准教授、日本文化研究所共同研究員）。

日本文化研究所研究会を3回開催した（第1回、報告者・題目…武井謙悟（PD研究員）「近代の仏教儀礼論序説」から）、7月29日、オンライン開催。第2回「宗教者の家族にみる寺院・神社運営の実態―近現代日本における役割と変化―」、報告者・題目…丹羽宣子（立教大学助教、日本文化研究所共同研究員）「家族経営型寺院」の現在地」、牧田小有玲（日本文化研究所研究補助員）「地方神社にみる女性の関与とその社会的定位」、高田彩（日本文化研究所客員研究員）「宗教者の家族労働と女性の主体性―武州御嶽山の宿坊を事例に―」、コメント…工藤万里江（立教大学兼任講師）、10月18日、ハイブリッド開催。第3回、報告者・題目…星野靖二「岸本英夫と日本文化研究所」・「盲点の会」の再検討」、ギャレット・ワシントン（マサチューセッツ大学アマースト校准教授、國學院大學国際客員研究員）「戦前日本の女性在家仏教信者たちと帝国のプラン」、3月26日、ハイブリッド開催。

令和7年度研究事業成果報告 学術資料センター(考古学資料館部門)

学術資料センター(考古学資料館部門) 事業

深澤 太郎

一、研究事業の概要

日本文化の形成過程と、その普遍性・特殊性を明らかにするための事業を推進し、博物館における展示・出版・デジタルミュージアム等を通して研究成果を公開する。

(1) 考古・民俗資料の収集と調査研究

旧考古学資料館から継続してきた考古・民俗資料の収集・整理保管と、調査研究機能を担う。また、収蔵資料の再整理を進めつつ、『収蔵品目録』の整備を図る。

(2) 歴史資料の収集と調査研究

旧伝統文化リサーチセンター後継事業であり、歴史資料の収集・整理保管と、調査研究機能を担う。特に、考古学・民俗学関係アーカイブの資料化を推進する。

(3) 学術資料のデジタル化と公開

旧日本文化研究所学術フロントニア後継事業であり、事業1・2にて再整理した資料と、事業2にて取り扱っている劣化画像の再生活用、および公開を実施する。

(4) 祭祀遺跡・祭祀祭礼等の調査研究

事業1・3と協働しつつ、本学関係者が調査してきた考古学的遺跡や、祭祀祭礼等の民俗記録を再検討するため、現地関係機関等と連携した調査研究を行う。

(5) 学芸職実践教育

以上の事業に研究員等・臨時雇員を参画させることで、次世代の学芸研究職員

を育成する。

二、令和7年度の研究事業成果

(1) 考古・民俗資料の収集と調査研究

計画的に館蔵資料の収集・整理を進め、昭和3(1928)年の考古学標本室創立時から運用してきた『列品台帳』をもとに、『収蔵品総目録』の整備を継続した。令和7年度は、特に中世城郭出土瓦の再整理を進め、出土地不詳の金箔桐紋軒丸瓦と豊臣期伏見城出土品との同范関係を『國學院大學博物館研究報告』第42輯にて報告した。

また、柏木貨一郎旧蔵資料一括のうち、大仙陵古墳(仁徳天皇陵古墳)出土資料については、堺市・日鉄テクノロジ株式会社との協定に基づき、考古学的検討と先端的科学分析を推進している。関連成果は、堺市博物館講演会「仁徳天皇陵古墳の新知見」(7月27日・8月23日)、関西大学東京泊園塾「新発見 仁徳天皇陵古墳の副葬品」(2月28日)等で公開した。これらの成果は、5世紀代における倭国の実態を解明するための貴重な情報をもたらしものであり、新聞、テレビなどでも広く紹介された。

そのほか、学術資料センター研究会「埴輪の起源―器台から円筒埴輪へ―」(春成秀爾、4月12日)も開催。さらに、島根大学法文学部山陰研究センター・日鉄テクノロジ株式会社主催、本センター共催のシンポジウム「材料科学と考古学

がときあかす東アジアの青銅器」(3月14・15日)を本学で開催し、本学からは古代祭祀遺跡出土の小型青銅鏡について発表した。

(2) 歴史資料の収集と調査研究

「柴田常恵野帳資料」のうち、「考古書留」の解題と翻刻(三)を『國學院大學博物館研究報告』第42輯にて公開した。また、少年時代の大場磐雄が編んだ同人考古学雑誌『上つ代研究』は、大正期の考古学界と少年考古学者の活動を伝える有益な資料であり、茂木雅博客員教授・茨城大学名誉教授監修のもとで翻刻・刊行し、近代考古学史研究の基盤を整えた。

(3) 学術資料のデジタル化と公開

「國學院大學博物館収蔵資料総目録(考古)」「社寺等絵葉書資料」に加え、研究者個人資料のデータベース化を進めた。令和7年度は、考古学分野の「大場磐雄写真資料」35mmフィルム4,277点の目録を作成した。また、研究事業で生成されたデータを保存・活用する仕組みを整えるため、「伊豆峰データベース」の再整理を実施した。「柳田康雄写真資料」とともに令和8年度の公開を目指している。関連して、アート・ドキュメンテーション学会第36回大会(6月14日)において、本学デジタルミュージアムの整備経緯と今後の課題を報告した。

(4) 祭祀遺跡・祭礼等の調査研究

神道資料館部門と共同し、美しい伊豆創造センターとの連携協定と三嶋大社の協力のもと、「伊豆地域の宗教考古学的研究」を推進した。また、鹿島学術振興財団一般研究助成「三宅島の伝統文化の保全に関する基盤的研究」を獲得し、文化財研究・保護のケーススタディを進め、成果報告書「三宅島の伝統文化の保全に

関する基盤的研究」を刊行した。研究で得られた知見や調査成果は、東京都三宅村からの招聘を受けて実施した東京文化財ウィーク2025講演会(11月3日)や「日本の祭り―三宅島・神着牛頭天王祭―」(8月24日、東京MX)等でも紹介した。

「神社境内祭祀遺跡の研究」事業では、新たに福島県白河市と研究協定を締結し、建鉾山祭祀遺跡・三森遺跡の現地踏査、および出土遺物の再検討を実施した。また、神道資料館部門と共同して、京都府吉田家墓地の現地調査も行った。

(5) 学芸職実践教育

当センターに所属する研究員等・臨時雇員のうち、大学院を修了した考古班3名が、帝京大学文化財研究所・埼玉県教育委員会・福島県教育委員会に採用された。事業推進に伴う実践的な教育効果を果たし得たものと考えている。

三、博物館における成果公開

令和7年度は、特別展・企画展として「アイヌモシリ・アイヌの世界と多様な文化」(2025年6月28日～9月23日)、「性別越境の歴史学・男/女でもあり、女/男でもなく」(2025年12月6日～2026年2月23日)、「佐野光一コレクション和の硯・SUZURI」(2026年3月7日～5月10日)を開催。特集展示「三嶋大社の歴史と古景観・写真乾板・絵葉書からAIの活用まで」(2025年4月15日～5月18日)を、当館が監修してKITTIE丸の内で開催した三嶋大社企画展「伊豆の歴史と三嶋大社」(2025年4月19日～5月6日)とのタイアップ企画として実施した。

令和7年度研究事業成果報告 学術資料センター（神道資料館部門）

学術資料センター（神道資料館部門）事業

大東敬明・木村大樹

一、研究事業の概要

学術資料センター（神道資料館部門）事業は、同部門が所管する学術資料の整理・保存・研究をすすめ、研究・教育に活用できる体制を整えること、あわせて本学が所蔵する神道に関わる資料及び神道史の研究を進めることを目的とする。この成果は、國學院大學博物館における展示や、本部門の刊行物のほか、國學院大學博物館 Online Museum などを通して公開する。

（1）所管資料の整理・保存・研究

本部門が所管してきた資料の整理・保存・研究を継続するとともに、本学が所蔵する宮地直一・西田長男両博士旧蔵資料をはじめとする諸資料群の整理・調査を行い、研究・教育・展示などに適切に対応できる体制を整える。

（2）神道史研究の推進

（1）で得られた情報をもとに、本学の学術資料を活用し、神社史、祭祀・祭礼史を中心に神道史を再検討し、さらに学内外における教育・普及事業へと反映させる。

（3）研究成果の公開

（1）（2）で得られた成果は、本部門の刊行物、國學院大學博物館における常設展・特別展・企画展・特集展示、國學院大學博物館 Online Museum における YouTube 番組などにて公開する。

二、令和7年度の研究事業成果

（1）所管資料の整理・研究・分析・保存

本部門では、所管資料の整理・点検・再目録化を進めている。また、本部門が所管している宮地直一旧蔵資料・西田長男旧蔵資料の調査・整理を進めた。

このような資料整理の成果は、後述する神道研究の推進や展示と関連しているため、個別の成果については後述する。

（2）神道研究の推進

『延喜式』に関する研究

令和9（2027）年は、平安時代の法典である『延喜式』が成立した延長5（927）年から一一〇〇年の節目である。本部門では、同年に実施を計画している企画展などに先立ち、いずれも「神まつりをめぐる」「法」と題して、関連する特集展示・シンポジウム・冊子刊行を行った。

特集展示では、先述の宮地直一・西田長男旧蔵資料に含まれる、古代法制関係資料や研究ノート等10点を展示した（下記）。令和8年2月28日（土）に開催した公開シンポジウム（於：本学・常磐松ホール）は、早川万年氏（元岐阜大学教授）の基調講演「『延喜式』と祭祀―神祇令から神祇式へ―」をはじめ、高夢雨本機構PD研究員と木村による発題、加瀬直弥本学教授のコメントを得て、大東の司会のもと討議を行った。また、刊行物としても、加瀬直弥「法制度と神道・まつ

り」を巻頭に、計6名7本の論考を得た。これらの成果を踏まえ、令和8年度には、本学デジタルミュージアム上の『延喜式』関連データベースの拡充などの作業を行い、令和9年度の企画展に向けて研究を進展させていく予定である。

吉田家・吉田神道（唯一神道）研究

先述の宮地直一・西田長男両博士旧蔵資料の中には、吉田家・吉田神道に関わる資料が多く含まれる。このなかには、西田長男が論文で用いながらも、これまで確認・検証できなかった資料も数多くある。本年度は、西田博士資料の目録化を継続するとともに、そのような資料の特定や、資料それぞれについての研究を進めた。このなかで、大胡友暉（研究ノート）慶長年間の大坂豊国社勧請と吉田家（『國學院大學博物館研究報告』42）を得た。なお、同研究の成果は、令和8年度に國學院大學博物館で行われる企画展「秀吉兄弟とその時代―「秀」の一族の「覇気」―」（令和8年7月7日～9月13日）及び、その関連でも公開した。

このほか、吉田家・吉田神社のご理解・ご協力をいただき、岡田莊司本学名誉教授とともに、吉田家墓所の調査を進めている。

・江戸の祭祀研究と地域連携

企画展「江戸・東京の祝祭とおしゃれ―飾る―飾る都市と人―」（令和7年4月26日～6月22日）

・「中世日本の神々―物語・姿・秘説―」（令和7年10月4日～11月30日）

「江戸・東京の祝祭とおしゃれ―飾る都市と人―」は、江戸・東京における飾る都市と人をテーマに、街や人が、よそいきな姿をみせる様子をとりあげたものである。この中で、テーマの一つとしたのが祭礼であり、本部門で進めてきた江戸・東京の祭り研究の成果を反映させた。また、同展示では、神田神社（東京都千代田区）、紅ミュージアム（東京都港区）にご協力いただいた。

「中世日本の神々―物語・姿・秘説―」は、令和6年度以降、調査・研究を進めてきた、本学所蔵の中世神道あるいは中世の神祇信仰に関わる資料を展示した。同展示では、資料情報の一部や、解説を、スワンソン・エリック・春希氏（米国、ロヨラ・メリーマウント大学准教授）の協力を得て英訳した。この一部を本学デジタルミュージアム上で、公開する予定である。

なお、会期終了後、候補としつつも展示することができなかった資料を特集展示「中世日本の神々―番外編―」として公開した。

特集展示

・「教派神道と神々」（会期：令和7年5月20日～6月22日）

・「神まつりをめぐる」「法」（会期：令和7年8月22日～9月23日）

・「中世日本の神々―番外編―」（会期：令和7年12月6日～令和8年1月16日）

「神まつりをめぐる」「法」「中世日本の神々―番外編―」については既述のとおりである。

令和7年度研究事業成果報告 校史・学術資産研究センター

神社資料情報の収集と研究資源化事業

渡邊 卓

一、定例業務―校史資料の整理・研究

校史研究部門では、研究員・臨時雇員を中心に校史関連資料の整理(目録化)を着実に進め、令和7年度は約400点におよぶ資料を新たに整理して総合目録の充実を図った。なかでも、年度中に急遽寄贈を受けた近藤喜博氏関連資料群(約3000点)については、速やかに目録を作成し、寄贈者へ進呈した。この資料群は本学の校史にも深く関わるもので、学内外の研究に資する貴重な資産となる。

写真資料の保護・保存については、本センター所管の写真資料の整理に着手し、卒業アルバムデジタル化(11冊・2283カット)を進めた。卒業アルバムは本学の学生生活や学内行事の変遷を伝える一次資料であり、その応急的な保護を急ぐと同時に、将来的な体系的保存に向けた基盤を整えた。

問い合わせ対応の面では、今年度は学外から折口信夫関連の多数の照会が寄せられた。本センターでは、真摯に対応するとともに、折口資料が抱える喫緊の課題の存在を改めて確認した。学内外からの校史・学術資産に関する問い合わせへの対応と、自校史に関する学内研修(新任職員研修・新任教員研修)にも従事した。

二、神社資料情報の収集と研究資源化

「神社資料情報の収集と研究資源化事業」においては、本学図書館が所蔵する昭和30年代から同50年代に旧・日本文化研究所が実施した神社資料探訪事業の成果として作成された写真帖・マイクロフィルムの現状確認と、そのデジタルライズ(44ファイル)を進めた。当初の想定を上回る分量の写真帖が確認されたほか、一部マイクロフィルムには酢酸シンドロームの進行が認められ、応急的処置を要する状況にある。これらの資料は前近代の神社の様子を伝える貴重な一次資料群であり、劣化が進む前の緊急的なデジタル保存は喫緊の課題であった。

事業と並行して、本学図書館所蔵の貴重資料の調査・研究にも取り組み、その成果を図書館ホームページのデジタルライブラリー上で解題として順次公開した。また本学図書館所蔵の神道史・神社史関連史料群である『吉田家文書』『鈴木家文書』については、本センター所属教員が外部資金を獲得し、その調査・研究を本格的に推進した。これらの史料群は神道・神社史研究における基礎資料として学術的価値が高く、外部資金による継続的な調査は今後の研究資源化に向けた重要な成果となった。

三、研究会の開催

令和7年度は、研究開発推進センターと共催で公開研究会「神社史料の保存と継承―神社史料情報の学術還元」を開催した。研究会には学内外から多数の参加者が集い、中世神社史料研究・近代史学史・松尾大社史料など多様な観点からの報告と活発な討論がおこなわれた。大藪海氏、比企、野村朋弘氏、遠藤基郎氏の各報告は、神社史料の保存・継承から学術還元といったプロセスを多角的に照射するものであり、今後の本センターの研究事業に向けた実践的知見を提供した。本研究会の概要は、機関誌『國學院大學校史・学術資産研究』第18号(令和8年3月)に研究会記録として掲載された。

四、対外連携―特別展示とシンポジウム

本センターの対外連携の実績として特筆すべきは、横浜都市発展記念館(公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団)との協働である。同館は令和8年1月24日から4月12日にかけて特別展「戦争の記憶 横浜と軍隊の一二〇年」を開催したが、この展示に際して本センターは学校史関連資料を展示品として貸し出した。本展は、1853(嘉永6)年の黒船来航から1975年のベトナム戦争終結までの約120年間を対象に、横浜と軍隊との関係を正面から問い直す意欲的な試みであった。本学たまプラーザキャンパスが所在する青葉区には、かつての陸軍射撃場の地形が今なお残ることも展示の中で紹介されるなど、本学の歴史と地域史が交差する内容となっている。学校法人國學院大學も本展の後援団体に名を連ね

た。

また、特別展に関連するシンポジウムとして、令和8年3月7日には公開シンポジウム「地域に眠る文化資源の発掘と活用―横浜地域の「戦争の記憶」を中心に―」が、國學院大學横浜たまプラーザキャンパスを会場に開催された(主催…横浜市ふるさと歴史財団、共催…國學院大學研究開発推進機構)。定員200名の会場には学内外から多くの参加者が集った。報告者には、横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターの浪形早季子氏、本機構共同研究員の坂井久能氏、横浜都市発展記念館の吉田律人氏が登壇し、藤田大誠教授が司会を務めた。上山和雄名誉教授・前横浜開港資料館館長らのコメントを交えた総合討論も行われ、地域の文化遺産としての「戦争の記憶」を掘り起こし、学術・社会へ還元する意義が広く共有された。

五、成果発信

令和7年度における研究成果は、機関誌『國學院大學 校史・学術資産研究』第18号(令和8年3月)に集約されている。所載論考は、いずれも本学所蔵資料の学術的価値を広く発信する成果となった。

本学図書館デジタルライブラリー上でも、貴重資料の調査・研究成果を解題として順次公開し、学内外の研究者・一般利用者への情報提供を継続している。また博物館での展示を通じた成果発信も継続しており、各種学術雑誌等への投稿・掲載を含め、多面的な発信に努めた。

令和7年度研究事業成果報告 研究開発推進センター

「カミ学」研究拠点の構築

武田幸也・半田竜介

一、研究事業の概要

國學院大學研究開発推進機構では、令和4（2022）年度より研究開発推進センターの研究事業として、「神道・日本文化の先端的研究」を開始した。その後、当該事業を推進する過程で、既存の神道学の課題を検討し、より広範な視点から神道と日本文化について研究する必要性を確認した。

本機構は、神道・国学研究の推進および国際交流や研究成果の公開発信事業を担う「日本文化研究所」、考古学・神道の両資料館を統合した「学術資料センター」、本学の校史や本学が有する学術資産に基づいた研究を行う「校史・学術資産研究センター」という3つの本学共同利用研究機関と、建学の精神に基づく研究推進のための企画・立案や外部資金の獲得・運営を行う「研究開発推進センター」、学術研究の成果の公開・発信を行う「國學院大學博物館」により構成されている。本研究プロジェクトは、先述の課題を克服していくため、これらの機関が展開する各事業をより一層有機的に結びつけ、学外の研究者とも協働した研究プロジェクトを立ち上げることを目的に構想されたものである。

こうした状況をふまえ、本機構では学長の指示のもと、令和5（2023）年度より大型の共同研究推進プロジェクトの創設に着手し、全学部参加型の大規模研究プロジェクトとして「カミ学」を構想

した。本研究プロジェクトでは、固定的な概念として理解されがちな「神」を、日本の多面的な「神」概念を手がかりに、神をヒトと世界とを媒介する新たな動的概念「カミ」として再定義し、既存の宗教という枠組よりも広範かつ通文化的な視座から、分野越境的な研究と人文学の社会還元による課題解決的な研究の推進を試みている。

本研究プロジェクトは令和6（2024）年度後期から具体的な運営が開始され、令和7（2025）年度から正式な研究開発推進機構全体のプロジェクトとして位置付けられ、笹生衛機構長のもと推進されている。こうした「カミ学」に関する研究プロジェクトに加え、研究開発推進センターが従来実施してきた神社本庁総合研究所との研究協力、定期刊行物の刊行、神道文化会など学外研究団体との連携などを行った。なお本事業は院友神職会ならびに神社本庁からの指定寄附金に基づいている。

二、令和7年度の研究事業成果

○「カミ学」会議・研究会

令和7年度は、「カミ学」内の各計画研究の代表者と研究内容の詳細について議論する代表者会議、および「カミ学」に参画する全ての研究者間の情報共有と学術交流を目的とした全体会議を行うことで、プロジェクト全体の方針について議論を深めていった。また、参画研究者を招いた研究会や学知の社会還元のため

の講演会を開催することで、関連する学問領域について最新の研究成果や研究動向を学内外に広く発信した。

令和7年度の実施件数は、代表者会議を1回、全体会議を2回開催した。また研究会を8回開催し、一般向けの講演会を1回開催した。令和8年12月迄の内容は、「機構ニュース」No.38にて報告しているため、ここでは前号以降に実施した全体会議および公開研究会について報告する。

①会議

【第2回全体会議】

開催日…令和8年3月14日（土）
会場…國學院大學渋谷キャンパスAMC棟5階会議室06（対面・オンライン併用）

②研究会

【公開研究会】「近世神社由緒記・縁起の形成と学知」
（神道宗教学会・科研費研究（基盤B）「近世神道の「復古・復興」と「由緒記」——京都稻荷社を中心として——との共催）

開催日…令和8年2月28日（土）
会場…國學院大學渋谷キャンパス6号館地下1階6B13教室（対面・オンライン併用）

（報告）
・野口雄五（國學院大學大学院博士前期課程）「伊勢両宮同座をめぐる「幽契」と由緒——中世的概念の近世的再構成——」
・菊池圭祐（國學院大學大学院博士後期課程）「偽書『旧事大成経』を用いた由緒記形成の一面——伝猿渡盛道撰述「府中六所宮由緒記」の成立をめぐる——」

・間枝遼太郎（北海道大学大学院専門研究員）「近世諏訪社の由緒形成の諸相」

（コメント）
・山下久夫（金沢学院大学名誉教授）
（司会）
・新井大祐（國學院大學准教授）
（コーディネーター）
・松本久史（國學院大學教授・研究開発推進センター長）

【公開研究会】「古墳時代の祭祀と景観」
開催日…令和8年3月14日（土）
会場…國學院大學渋谷キャンパスAMC棟5階会議室06（対面・オンライン併用）（報告）

・青柳泰介（奈良県立橿原考古学研究所）
「ヤマトにおける古墳時代の地域開発拠点（祭祀拠点）」と景観——御所市南郷遺跡群と天理市布留遺跡を中心に——」（コメント）
・笹生 衛（國學院大學教授・研究開発推進機構長）

○神社本庁総合研究所との研究協力など
神社本庁総合研究所との研究協力のもと「明治期神社関係法令史料集成（仮）」の刊行（令和9年6月神社本庁より刊行予定）に向けた資料調査や関係法令のデータ化などを継続して行った。今後も協議を重ねつつ研究活動を協力して進めていく。

【研究開発推進センター研究紀要】第20号を刊行し、構成員による論文をはじめ「SDGs関連文献レファレンスガイド」、公開講座記録、講義記録、彙報を収載した。

また学外団体との連携として、一般財団法人神道文化会の公開講演会「第六十三回神宮式年遷宮はじまりの年」（令和7年6月14日）を共催した。

令和7年度研究事業成果報告 研究開発推進センター

「SDGs」と建学の精神」研究事業

宮本 誉士

一、研究事業の概要

本事業は、「渋谷学」等の従来の研究成果を基盤として、国連「SDGs」(持続可能な開発目標)を建学の精神から考察するとともに、本学の様々な研究成果や取り組みも含めて、「SDGs」に関連づけて社会へ発信することを目的とする。また、本学の教育活動や社会貢献・地域連携へとそれらを展開させていくことで、その成果を教育や社会へと還元することを目的として、以下の①～⑤に取り組む計画である。

- ① 建学の精神から「SDGs」を考える理論的な研究を推進する。
- ② 学内における取り組みを集約するためのプラットフォーム(ワーキンググループ等を含む)構築を目指し、学内の連携を行う。
- ③ これまでの研究成果を再構築し、学外協定等を加味して、社会貢献・地域連携に積極的に活用する方途を模索する。
- ④ 「SDGs」と関連する社会的問題についての研究を行い、広く社会貢献・地域連携に資するプロジェクトを構想する。
- ⑤ 上記①から④の研究成果を学部教育に還元する。

二、令和7年度の研究事業成果

(1) 文献調査と文献目録の作成

本事業を開始した令和4年度以降、研

究員を中心に進めてきたSDGs関連文献調査の成果として、「SDGs関連文献レファレンスガイド」「伝統文化」「まちづくり」「コミュニティ」をキーワードとして、「(國學院大學研究開発推進センター研究紀要)第20号、令和8年3月」を公開した。これは、特に「伝統文化」「まちづくり」「コミュニティ」をキーワードとして、日本社会の持続可能性を検討する際に確認すべき基礎文献の紹介を目的に作成したものである。

(2) 公開講演会・社会貢献・地域連携

本事業の公開講演会として、令和7年6月17日、S・SAP協定(シブヤ・ソーシャル・アクション・パートナー協定)に基づく渋谷ハチコウ大学(事務局「渋谷区学びとスポーツ課」)との連携による公開講演会「渋谷から始まった！都市と農業をつなぐアグリノベーション」を実施した。本企画は、小倉崇氏(渋谷区ふれあい植物センター園長、NPO法人アーバンファーマーズクラブ代表理事)による講演会とともに、会場となった渋谷区ふれあい植物センター内の見学ツアーを実施することで、渋谷で展開する都市農業の現状と未来とを考えることを目的として開催したものである。

また、令和8年2月24日には、渋谷区における持続可能な社会の形成を目指した活動を行うシブヤサステナブル推進協議会(シブサス)と一般社団法人渋谷未来デザインとの連携により、公開シ

ンポジウム「渋谷の未来とまちづくりーサステナブルなシブヤをめざしてー」を5301教室で開催した(共催「一般社団法人渋谷未来デザイン」。本企画は、長田新子氏(一般社団法人渋谷未来デザイン事務局長)、松嶋範行氏(シブヤサステナブル推進協議会リーダー)、傍嶋賢氏(一般社団法人CLEAN&ART代表理事)、古沢広祐氏(本学研究開発推進機構客員教授)、田原裕子氏(本学経済学部教授)を登壇者として迎え、これまで連携してきたシブサスの活動内容に加えて、渋谷未来デザインの掲げる行政と民間との協働による持続可能なまちづくりについての知見を得ることで、サステナブルなシブヤの未来について考えることを目的として開催したものである。

また、令和8年3月7日には、公開研究会「地域の持続性と「まつり」」を5301教室で開催した。本企画は、小林稔氏(本学観光まちづくり学部教授)による報告「祭り」とレジリエンスー祭り」がもたらす持続可能性ー、石垣悟氏(本学観光まちづくり学部准教授)による報告「祭りをつなぐ子どもと女性」、板井正斉氏(皇學館大学文学部神道学科教授)、古沢広祐氏(本学研究開発推進機構客員教授)のコメントの後、全体討議を行うことで、震災復興における「まつり」の力、「子どもの祭り」などを通して、みる「まつり」の持続性を焦点として、「まつり」と「地域の持続性」との関係性を検討することを目的に開催したものである。※肩書は開催当時。

(3) 関連授業の実施

本事業の関連授業として、以下の3つの授業をマネジメントした。(A)「共

存・共生の思想(持続可能な社会を目指して)」「(令和7年度前期水曜)」「(B)「國學院の学問(渋谷学)」「(令和7年度後期水曜)」「(C)「共存・共生の思想(持続可能な社会への取り組み)」「(令和7年度後期水曜)の3コマのオムニバス授業(共通教育科目)である。(A)は、全ての講義において、関連SDGsのゴール・ターゲットを示し、日本・世界の諸課題とSDGsとの関連性を検討する講義を展開。(B)は、渋谷区環境政策部などから講師を迎え、渋谷におけるSDGsの課題を考える講義を実施した。(C)は、持続可能な社会作りの教育を行う認定NPO法人開発教育協会(DEAR)、シブヤサステナブル推進協議会などから講師を招き、SDGsの指標に関わる社会問題の具体的内容について講義を行うとともに、その解決方法や取り組みについて学生達が話し合うグループディスカッションを実施した。(C)の授業運営の取り組みについては、『國學院大學教育開発推進機構紀要』第17号(令和8年2月)の「取り組みレポート」として掲載した。

なお、(A)(B)は、全学的な取り組みと関連させるため、各学部の教員が講師として参画するオムニバス授業である。

(4) 成果公開

本事業の成果公開として、第3回「しぶカフェ」の講座記録、オムニバス授業「共存・共生の思想」の講義記録、論考等を『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第20号に掲載した。また、本事業で実施した「しぶカフェ」のYouTube動画については、関連授業の参考動画として活用し、学部教育に還元している。

令和7年度研究事業成果報告 研究開発推進センター 國學院大學「古典文化学」の創出研究事業

渡邊 卓

一、研究事業の概要

本事業は、國學院大學が平成28年度文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」（タイプB…世界展開型）として選定された「古事記学」の推進拠点形成―世界と次世代に語り継ぐ『古事記』の先端的研究・教育・発信―研究事業を継承するもので、令和3年度研究事業「神道と日本文化の創造的『古典学』―令和の新しい国学研究―基盤整備事業」の後継事業にあたる。

本事業では、「国学」に由来する本学の特色ある教育・研究をより一層、発展させることを目的とする。そのために中期五カ年計画のもと、5年間にわたり次の事業を推進している。

① 国際シンポジウム・ワークショップ等の開催

② 『古事記』『万葉集』の文献学的研究

③ 「国学」的「古典」研究の再検討

④ 研究成果の教育還元

⑤ 「古典学総合データベース」の構築

⑥ 研究成果の社会発信

令和7年度における①～⑥の研究成果は次の通りである。

二、令和7年度の研究事業成果

①では昨年度より継続して五神宮会（英彦山神宮、霧島神宮、鹿兒島神宮、鶴戸神宮、宮崎神宮）と共催、さらに霧島市・霧島市教育委員会、院友会・若木育成会の鹿兒島県支部とも連携し、鹿兒

島県霧島市にて公開講演会「海の神・山の神を祭る社―文化財と地域社会―」を令和7年7月6日（日）に開催した。講演者・題目は次の通り。

・山下建（霧島神宮禰宜）

・「霧島神宮のご祭神とご由緒」

・伊賀昇三（鹿兒島神宮禰宜）

・「鹿兒島神宮のご祭神とご由緒」

・渡邊卓（本学研究開発推進機構准教授）

・「海の神・山の神の系譜」

・小水流一樹（霧島市教育委員会社会教育課文化財グループ主任主事）

・「文化財から見る二つの神宮―二つの相違点と守る意義―」

・松本久史（本学神道文化学部教授・研究開発推進機構研究開発推進センター長）

・「近世国学者による日向三代神話理解と古典」

当日は神社関係者や一般来場者、研究者など約230名が参加した。なお本講演会は研究開発推進センターで実施している「カミ学」研究拠点の構築の成果でもある。令和8年度も五神宮会と共催して宮崎県での公開講演会を予定している。

また、令和8年2月16日（月）には文学作品に描かれた祭りや男女との関わりを考える公開研究会「祭りと男と女」を開催した。講演者・題目は次の通り。

・大石泰夫（本学文学部教授）

「祭り」でうまれる歌」

・原由来恵（二松学舎大学文学部教授）

「可視化された祭―「車争ひ」を中心に―」

・森田雅也（関西学院大学文学部教授）

「好色一代男」と大原ざこ寝―西鶴の描く恋の二道―」

当日は研究者や大学院生、一般来場者など50名が参加した。

②では、昨年度より継続して『古事記』の本文校訂・訓読・注釈および英訳を進めた。AMC棟5階の会議室06で定例研究会を3回開催した（zoom併用のハイブリッド開催）。各回の内容は次の通り。

・第1回…令和7年5月28日（水）

谷口雅博「古事記注釈」検討…古事記注釈（44）「天孫降臨（二）」、研究報告…

鶴橋辰成「古事記」火神被殺神話における山津見神の出現と迦具土神の死の描写」

・第2回…令和7年7月31日（水）

谷口雅博・鶴橋辰成・小野寺紗英「古事記注釈」検討…古事記注釈（45）「天孫降臨（三）」、研究報告…菅健一郎「古事記」における建御雷神の「趺坐」―

降下する神の表現―」

・第3回…令和7年11月13日（水）

谷口雅博・鶴橋辰成・小野寺紗英「古事記注釈」検討…古事記注釈（46）「猿女の子」

また、古事記ビューアー・古事記研究データベースの修正・更新を行った。令和7年度の閲覧件数は神名データベースが237,794件、氏族データベースが4,120件、地名データベースが2,751件（いずれも各データベース

のトップページの閲覧件数）。アクセスは、日本から485,842件、海外からは計26,595件（上位5カ国である中国・アメリカ・シンガポール・韓国・台湾の合計）の閲覧があった（令和7年4月1日から令和8年3月31日迄の1年間）。

また創立140周年記念事業である万葉集全注釈『萬葉集正義』の出版事業をマネジメントし、校正・編集作業を行った。令和7年10月に『萬葉集正義』第三が刊行されている。

③では、本学所蔵「井上氏旧蔵資料」（井上頼因―頼文―頼寿三代の資料群）を昨年度から継続して整理し、頼因・頼文までの資料についての簡易目録を精査し完成させた（件数は2,495点）。

④では、本事業に関わる専任・兼任教員の担当科目において成果を公表することと教育に還元した。

⑤では、各データベースを横断して検索する機能を追加するなど改修を行い、利用者の利便性の向上を図った。

⑥では、②の成果である「古事記」注釈・英訳を『國學院大學研究開発推進機構紀要』第18号に掲載し、注釈は古事記ビューアーでも公開した。また同紀要に掲載されている大谷歩論文および大沼宜規資料翻刻は、令和6年度開催の公開研究会「木村正辞と万葉集研究」（令和7年2月16日）での発表に関係するものである。

各種データベースの成果は本事業ホームページで継続的に公開している。また、英訳古事記は、「古事記」注釈の第10章までの英訳PDFをホームページで公開し、今後も随時公開を予定している（アクセス数は1年間で2,414件）。

國學院大學博物館事業

高橋 あかね

一、研究事業の概要

当館は、博物館法に準拠した博物館指定施設であり、日本文化の研究に必要な文化財を収集・保存して教育参考に供し、学術的な研究成果を広く社会一般に公開・発信することを目的とする機関である。

(1) 展示公開

校史・考古・神道の常設展示と、時宜に合ったテーマによる機動的な特集展示、そして複数年度に亘る研究の成果公開となる特別展・企画展を実施。併せて、図録などの編集・出版も行う。

(2) 教育普及・情報発信

オンラインミュージアム等で展示解説を公開するほか、各種イベントを実施。また、デジタル・ミュージアム(DM)運営のハブとなり、外部データベースとの連携を含めて国際的に情報発信する。

(3) 環境整備・営繕

博物館における収蔵・展示空間の空気質・温湿度を観測・管理すると共に、総合的有害生物管理(IPM)を実施し、当館の収蔵資料・展示資料や、外部から借用する資料を適切に保護する。

(4) 運営支援

展示等に合わせ、SNSを活用して効果的に情報を発信。また、ミュージアムショップにおいて関連書籍・グッズなどを選定・販売し、展示をきっかけとして来館者の学びを深める機会を提供する。

二、令和7年度の研究事業成果

(1) 展示公開

当館の展示は、特別展、企画展をはじめ

め、研究成果公開展示、図書館・学部・大学院連携展示、外部機関連携展示、博物館学・考古学実習関連展示などからなり、教育参考・研究公開・社会貢献を企図する。来館者数は、昨年度比127%の70,610名。

【特別展・企画展】

企画展「江戸・東京の祝祭とおしゃれ―飾る都市と人―」(4月26日開幕)、国立アイヌ民族博物館共催 特別展「アイヌモシリアイヌの世界と多様な文化―」(6月28日開幕)、企画展「中世日本の神々―物語・姿・秘説―」(10月4日開幕)、企画展「性別越境の歴史学―男／女でもあり、女／男でもなく―」(12月6日開幕)、企画展「和の硯―SUZURI―佐野光一コレクション」(3月7日開幕)の5件。

【特集展示ほか】

國學院大學の伊豆研究100年記念特集展示「三嶋大社の歴史と古景観」、生誕190年記念「豊原国周―東京自慢名物会―」、「教派神道と神々」、大学院博物館学専門実習 特集展示「安本博と考古館―静岡考古館70周年―」、全国漢文教育学会共催展示「江戸の漢文教科書」、「神まつりをめぐる「法」」、「中世日本の神々―番外編―」、「富士山図・蓬萊山図―横山大観「蓬萊神山」を中心に―」、西南学院大学博物館サテライト展示「西洋の視線―地図にみる世界観と異境認識―」、同「祈りの歌の泉をたずねて―グレゴリオ聖歌のあゆみ―」、同「異国へのまなざし―鎖国体制下の日本がみた

唐人」の11件。

この内、特別展「アイヌモシリアイヌの世界と多様な文化―」は、プンカラ協働展示として開催した。特集展示「江戸の漢文教科書」は全国漢文教育学会共催のもと、同会第40回大会に併せて開催。大学間、および博物館間の研究協定に基づく西南学院大学博物館所蔵資料の特集展示も昨年度に引き続き開催している。

(2) 教育普及・情報発信

特別展・企画展に合わせて7本の動画を作成し、YouTubeチャンネル「國學院大學博物館 Online Museum」にて公開した。年度末のチャンネル登録者数は、令和6年度末比4,865人増の15,660人。

各種イベントとしては、三嶋大社、東京シテイアイ主催の「伊豆の歴史と三嶋大社」にて展示内容を監修。特集展示「三嶋大社の歴史と古景観」は、これに関わるものである。このほか、複合文化施設Bunkamura主催の「渋谷アート&ウォーク」において、スタンプラリー設置会場として参加。

また、企画展「江戸・東京の祝祭とおしゃれ―飾る都市と人―」に関連して、ミュージアムトークの他、紅ミュージアムの協力のもと、「江戸化粧再現講座by紅ミュージアム」および本学学生を対象とした「紅点し体験」を開催した。

特別展「アイヌモシリアイヌの世界と多様な文化―」では、共催の国立アイヌ民族博物館の支援により、ムックリ演奏体験やアイヌ文様の刺繍、描画体験の他、「アイヌ文化を知る講座」や「アイヌ伝統芸能―歌と楽器―」等各種イベントを実施した。

DM事業については、フロントサイント掲載のデータベース一覧ページのメンテナンス性を向上させるための管理画

面の改修を行った。また、既存のメタデータの最適化を行い、データベース間の整合性を図った。また、IIIF(International Image Interoperability Framework)での画像公開するために必要なマニフェストファイルデータの学内生成ツールの作成とIIIF公開に必要なサーバー調整を実施し、IIIFの運用を開始した。IIIFはデジタルの画像をインターネット上で共有・相互運用するための国際標準規格である。

(3) 環境整備・営繕

温湿度を通年管理した上で、担当学芸員による常時のIPMを行っている。春夏に文化財害虫などの増加傾向が見られるが、管理エリアへの侵入防止・駆除対策に注力。博物館会議・企画検討会で観測結果を共有し、都度改善点などを検討してきた。このほか、院友神職会東京支部から平型展示ケース1台の寄贈を受け、併せて同支部からの寄付金により、ウォールケースの修繕を進めた。

(4) 運営支援

SNSを用いた情報発信にも力を入れ、X(旧Twitter)のフォロワーは、令和6年度末比約3,000人増加の約21,000人。ミュージアムショップの運営も順調であり、来館者のニーズに応える運営が好評を博している。

表 令和7年度入館者数

月	人数(名)
4月	5,046
5月	4,872
6月	5,581
7月	5,924
8月	7,803
9月	4,601
10月	5,885
11月	9,689
12月	3,555
1月	5,612
2月	7,992
3月	4,050
合計	70,610

彙報

会議

■全体

・令和8年度第1回運営委員会、令和8年5月7日（木）、若木タワー4階会議室05

・令和8年度第2回運営委員会、令和8年6月30日（火）、メール審議

・令和8年度第3回運営委員会、令和8年7月2日（木）、若木タワー4階会議室05

・令和8年度第1回人事委員会、令和8年6月24日（水）、メール審議

・令和8年度第1回企画委員会、令和8年4月15日（水）、A M C棟5階会議室06

・令和8年度第2回企画委員会、令和8年7月1日（水）、A M C棟5階会議室06

■日本文化研究所

・令和7年度第6回所員会議、令和8年3月4日（水）、オンライン会議

公開講座

■全体

・記念シンポジウム「地域に眠る文化資源の発掘と活用―横浜地域の「戦争の記憶」を中心に―」（公益財団法人横浜ふるさと歴史財団主催、研究開発推進機構共催）、令和8年3月7日（土）、13:30～17:00、たまプラーザキャンパス1号館1503教室、報告：浪形早季子（横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター調査研究員）、坂井久能（本学研究開発推進機構共同研究員）、吉田律人（横浜都市発展

記念館主任調査研究員、本学研究開発推進機構共同研究員）、コメント：池田榮史（本学研究開発推進機構教授）、上山和雄（横浜開港資料館・横浜都市発展記念館館長、本学名誉教授）、司会：藤田大誠（本学人間開発学部教授）

■日本文化研究所

・2025年度第3回日本文化研究所研究会、令和8年3月26日（木）15:00～17:30、A M C棟5階会議室06（ハイブリッド開催）、発表：星野靖二（本学研究開発推進機構教授）、ワシントン、ギャレット（マサチューセッツ大学アマースト校准教授、本学国際客員研究員）

■学術資料センター

・公開シンポジウム「神まつりをめぐる「法」、令和8年2月28日（土）13:30～17:00、A M C棟1階常磐松ホール、基礎講演：早川万年（元岐阜大学教授）、発題：高夢雨（本学研究開発推進機構ポスドク研究員）、木村大樹（本学研究開発推進機構助教）、コメント：加瀬直弥（本学神道文化学部教授）、討議司会：大東敬明（本学研究開発推進機構教授）

■研究開発推進センター

・公開研究会「祭りと男と女」、令和8年2月16日（月）14:00～17:30、A M C棟1階常磐松ホール、講師：大石泰夫（本学文学部教授、原由来恵（二松学舎大学文学部教授、森田雅也（関西学院大学文学部教授）、司会：渡邊卓（本学研究開発推進機構准教授）

・公開シンポジウム「渋谷の未来とまちづくり―サステナブルなシブヤをめざして―」（一般社団法人渋谷未来デザインとの共催）、令和8年2月24日（火）14:30～17:00、5号館5301教室、基調講演：長田新子（一般社団法人渋谷未来デザイン事務局長）、パネリス

ト：松嶋範行（シブヤサステナブル推進協議会リーダー、一般社団法人渋谷未来デザインプロデューサー）、傍嶋賢（SOBASTUTA代表、一般社団法人CLEAN&ART代表理事）、デイスカッション司会：古沢広祐（本学研究開発推進機構客員教授）、コメント：テーター：田原裕子（本学経済学部教授）、総合司会：宮本誉士（本学研究開発推進機構教授）

・公開研究会「近世神社由緒記・縁起の形成と学知」（神道宗教学会・科研費研究（基盤B）「近世神道の「復古・復興」と「由緒記」―京都稲荷社を中心として―との共催）、令和8年2月28日（土）13:30～17:00、6号館6B13教室、発表：野口雄五（本学大学院博士前期課程）、菊池圭祐（本学大学院博士後期課程）、間枝遼太郎（北海道大学大学院専門研究員）、コメント：山下久夫（金沢学院大学名誉教授）、司会：新井大祐（本学研究開発推進機構准教授）、コーディネーター：松本久史（本学神道文化学部教授、研究開発推進センター長）

出張

■全体

・渡邊卓、「みとよ・かんおんじ発酵礼讃プロジェクト」に参加、および地元企業との研究連携の打ち合わせのため、令和8年4月25日（土）～4月26日（日）、香川県三豊市

■学術資料センター

・深澤太郎・木村大樹・岡田莊司・吉永博彰、「京都・吉田神社および吉田家墓所の調査」のため、令和8年3月16日（月）～3月18日（水）、京都府京都市

・深澤太郎、「三嶋大社との共同事業に関する打ち合わせ」のため、令和8年3月21日（土）、静岡県三島市

・深澤太郎・吉永博彰、「三嶋大社との共同事業に関する協議・報告」のため、令和8年5月27日（水）、静岡県三島市

■研究開発推進センター

・渡邊卓・半田竜介・鶴橋辰成・小濱歩・山崎雅稔、「令和8年度「古典文化学」公開講演会「神社の由緒と歴史―神武聖蹟と地域社会―」実施・運営のため」のため、令和8年7月3日（金）～7月5日（日）、宮崎県宮崎市・日南市

令和8年度 國學院大學 研究開発推進機構 人事一覧

令和8年7月1日現在

機構長		笹生 衛					
日本文化研究所長		星野靖二					
学術資料センター長		内川隆志					
校史・学術資産研究センター長		笹生 衛					
研究開発推進センター長		松本久史					
國學院大學博物館長		笹生 衛					
國學院大學博物館副館長		内川隆志 及川 聡					
専任教員	教授	大東敬明 深澤太郎 星野靖二 宮本誉士					
	特別招聘教授	池田榮史					
	准教授	新井大祐 齊藤智朗 渡邊 卓					
	准教授(特別専任)	武田幸也					
	助教	半田竜介 比企貴之					
	助教(特別専任)	木村大樹 藤井修平					
兼任教員	教授	内川隆志 笹生 衛 松本久史					
研究員	客員研究員	阿部常樹 鶴橋辰成 大澤絢子 高橋俊之 高見澤美紀 武井謙悟 鳥越多工摩 吉永博彰					
	ポストク研究員	青木 龍 大山晋吾 木村悠之介 高 夢雨 相良 海香子 鈴木健多郎 高橋亮一					
	研究補助員	糸数菜菜 稲見知華 郭 立東 篠原大輝 菅健一郎 西澤駿介 西谷瑞希 羽鳥佑亮 春田華奈					
客員教授		伊藤 聡 井上順孝 上山和雄 岡田莊司 金子皓彦 櫻井義秀 梶山林繼 辰巳正明 ナカイ,ケイト 根岸茂夫 林 淳 福尾正彦 古沢広祐 古谷 毅 ヘイヴンス,ノルマン 三橋 健 茂木雅博 柳田康雄 山中 弘					
共同研究員		天田顕徳	石井 匠	石川岳彦	一戸 渉	今井功一	今井信治
		今泉宜子	井本悠紀	植田 真	遠藤珠紀	大谷 歩	大貫大樹
		大沼宜規	大場あや	荻原 稔	小田真裕	小平美香	小高絢子
		尾上周平	大日方一郎	ガイタニディス,ヤニス	粕谷 崇	加藤元康	金子 拓
		河村忠伸	菊地大樹	城所喬男	キロス,イグナシオ	楠惠美子	倉住 薫
		栗木 崇	黒岩昭彦	康 成文	小林威朗	惟村忠志	齋藤公太
		坂井久能	佐藤一伯	塩川哲朗	神宮咲希	鈴木道代	芹口真結子
		曹 咏梅	大工原豊	高野裕基	高原光啓	高久 舞	田口哲也
		田中 潤	塚田穂高	土屋健作	問芝志保	戸浪裕之	中野裕三
		中村 大	中村耕作	西俣先子	丹羽宣子	野口生也	野田安平
		パウシユ,イローナ	原田雄斗	ビュテル,ジャン=ミシェル	平本謙一郎	二木泰史	冬月 律
		フレーレ,カール	牧野元紀	松本博明	水谷 類	三ツ松誠	宮澤安紀
		宮澤佳廣	村上 晶	森 悟朗	矢崎早枝子	柳原友子	山口 晃
		吉田扶希子	吉田律人	吉野 裕	ラーション,エーニルス	渡辺夏海	

令和8年度 事務局人事

学術メディアセンター事務部長	鶴澤英子				
学術メディアセンター事務部図書館担当部長	安達 匠				
学術メディアセンター事務部研究開発推進機構担当次長(たまプラーザ)	飯塚陽子				
学術メディアセンター事務部研究開発推進機構事務課長	佐野真之				
学術メディアセンター事務部	及川 聡				
研究開発推進機構事務課	志木志保	大岡達弘	鈴木一匡	東海林由光	手科竜一
	富永萌香	三塚広椰	藤盛紗暉	三島 隆	
國學院大學博物館学芸員	尾上周平	佐々木理良	高橋あかね	網谷哲成(兼務)	

往還

僕が國大の学部（考古学専攻・一〇八期）を卒業して大学院へ進学したのは、文字通り世紀末となった平成12年（2000）。実は、この院生時代に、研究開発推進機構の前身となった旧日本文化研究所で、大学院リサーチアシスタントや、臨時雇員として仕事をしていたことがある。いま、図書館・博物館などが入っているアカデミックメディアセンター棟（AMC棟）の校地には、かつて常磐松校舎が建っていた。その1号館が、大学院や祭式教室。2号館が、1階の考古学研究室や考古学資料館をはじめとする研



究室棟であり、5階に居を構えていたのが日文研だ。

当時は、梶山林繼先生が日文研所長、柴田紳一先生が主事で、文科省からの補助金を獲得し、学術フロンティア事業「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」を推進していた。もともと、梶山先生に資料をデジタル化するスキルがあるわけもなく、「オレにやあアイディアがあるんだ。でも、自分じゃあできねえからよ。金を取ってきな、みんなにやってもらうんだよ（阿々大笑）」とのこと。実に豪快だが、梶山先生の「面白い仮説を立てろ！」という口癖は、今でも僕の座右の銘となっている。この頃の日文研は、まさに國學院のシンクタンクだった。いちにはやく学術情報のWEB発信や、資

料のデジタル化に取り組んでいた井上順孝先生、黒崎浩行先生といった面々がいたのが強み。そう言えば、日文研のフロアには、大きな裁断機があった。これは井上先生が書籍や論文をスキャンするために、せつせと背を裁断されていたもの。まだ、卒論を原稿用紙に書いていた時代。いまや電子ジャーナルが当たり前だが、容赦なく本を切る！という斬新な行為に、時代の過渡期にいる実感を覚えたことも懐かしい。

このような日文研の中で、僕が関わっていた学フロ事業は、考古・民俗など様々な分野で蓄積されてきた画像資料のデジタル化を推進するもので、加藤里美先生たちが実務を担当。旧本館地下にも根城を構え、写真室職員で筆耕もされていた

日文研と四半世紀

深澤 太郎

大島敏史先生揮毫による「資料デジタル化研究室」の看板（DM作成室に伝存）を掲げた。今や、僕の八期上にあたる加藤さんと概ね同世代で、やはり日文研におられた松本久史先生が研究開発推進センター長、平藤喜久子先生が前日文研所長、そして遠藤潤先生が図書館長……光陰矢の如し、である。

その後、こういった先輩たちが、文科省の補助金事業であったCOE・ORC事業の中核を担っていた。僕は、これらの事業に最初から参加したわけではないが、毎度終盤になって抑えのピッチャーのように召喚され、なかなか得難い経験を積むことができた。平成14年（2002）にはじまったCOE事業「神道と日本文化の国学的研究発信の拠

点形成」は、昨年亡くなった小林達雄先生をトップに据えた計画。事務局は、阪本是丸先生が局長、松本先生が次長を務め、加瀬直弥先生、太田直之先生、新井大祐先生、森悟朗先生らも局員として参画。今は北海道短期大学におられる森さんが研究対象の一つとしていた江の島へ、バイトの僕らも含めた若手の皆で研修（遊び？）に行つたのも楽しい思い出だ。専門分野を横断して、時に和気藹々、時に侃々諤々。あの頃は、誰もが自由に研究を楽しむ余裕があったように思う。考古学を専門としていた僕が、本業の傍らで大峯の奥駈行者になったのも、COE事務局員で山岳宗教・修験道研究者の宝鏡院・中山郁先生（先達）から受けた薫陶の賜物である。

旧日文研が機構に改組された平成19年（2007）は、博士課程五年まで学生生活を送っていた僕が、師匠である吉田恵二先生（学術資料館長・博物館長を歴任）の命によって文学部考古学研究室の助手となった年。さらに、内川隆志先生に呼ばれて機構内の学術資料館の考古部門へ異動したのが二年後の平成21年（2009）。上司の内川さんは、学部時代に受講した博物館学課程での恩師でもあり、着任時に館蔵品の網羅的な再整理を命じられて以来、僕の勤務はそこにこそあると思って勤務してきた。その傍らで、学生の頃から私淑してきた三橋健先生や、神道部門の同僚らと連携しながら、神社史の考古学・歴史学・民俗学的な研究にも取り組んでおり、博物館展示でも地方神社所蔵資料の借用を積極的に行なっていた。これは、現在の博物館施設がオープンした平成19年（2007）に、「出開帳の場としての役割も期待したい」と訓示された岡田莊司先生の言葉を受けたもの。僕の行動原理は、当然にして僕自身の思想に拠る所が大なのだが、こうした恩師・先達の言葉ひとつひとつが、我が身に染み渡っているのである。

機構に異動した後は、学術資料館から博物館へと、ずっとミュージアム畑を歩んできたので、機構発足後の新日文研に直接所属することはなかった。しかし國大では、旧日文研を中核とした学術フロンティア事業が契機となり、機構でも新日文研をハブとして井上先生が主導する「デジタルミュージアム（DM）」を展開。そこでは、僕たち教員だけでなく、情報システム分野を担っている及川聡先生（学習支援システムKSNAAPの心臓部を開発）や、博物館・図書館・アーカイブの連携を構想されている安達匠先生など、大学事務局に所属するテクノクラートの参画も仰いだ。ちなみに、我々が勤務するAMC棟の名は、井上先生の命名。いまだ残された課題は少なくないが、まさに「オール國學院」教職一体となって、名実ともにアカデミックメディアの中心を構築せねばなるまい。

しかし、幾々記憶を辿ってみると、推進センター長の松本さんを除けば、いまの機構内で旧日文研の縁を食み、常磐松5階の空気を知っている残党は、もはや僕くらいしかないのではないだろうか。あれから四半世紀。平成も遠くなりになり、である。

ただ、忘れたくないことがある。昨年の日文研創立七十周年記念「日本文化を知る講座」でも話したが、かつての日文研は、坊やだつた頃の僕たちにとって、敗戦後の混乱期に、自国中心主義を排し、世界の諸文化との比較を通して、我が日本文化の位置付けをなすべしとした日文研綱領は、これからも永劫に堅持されなければならないと思う。貧すれば鈍するで、排外主義や、マイノリティ差別が横行する今日の日本社会は、日文研綱領が目指した理想とは、あまりにも遠い。このような精神的墮落に対して、学問を通して抵抗していくことも僕たちの使命なのではあるまいか。その皆は、日本文化研究所創設の理念と、かかる学統とを継承する我々自身なのだ。みんな。がんばっていきこう。

（研究開発推進機構教授）